TOKYO 2020

中国人が寂しく感じた五輪開会式、過去の栄光に縛られた日本の「黄昏」

2021.7.30 4:35

<ダイヤモンドオンライン>

莫 邦富

[作家・ジャーナリスト]

1953 年、上海市生まれ。85 年に来日。『蛇頭』、『「中国全省を読む」事典』、翻訳書『ノーと言える中国』がベストセラーに。そのほかにも『日中はなぜわかり合えないのか』、『これは私が愛した日本なのか』、『新華僑』、『鯛と羊』など著書多数。

1964 年の東京五輪で中国が抱いた思い

新型コロナウイルスの影響で、丸 1 年開催延期を強いられた東京オリンピックが、ついに開幕した。半年後に、2022 年北京冬季オリンピックの開幕を控える中国は、感染拡大の懸念があるにもかかわらず開催に踏み切った日本に対して、非常に高い関心を示している。

しかし、感染者数が伸び続けている日本の現状では、中国は東京に多くのメディア関係者を物理的に送り込むことはできない。そのため、インターネットでの「直播」（ライブ配信）や「小視

頻」（動画配信）がメインとなっている。

開会式の翌日、つまり 7 月 24 日の夜、私は、神戸在住の作家・毛丹青さんと、日本で活動する中国出身のタレント・段文凝さんと一緒に、中国最大の SNS である Weibo のライブ配信番組に出演した。20 万人以上が視聴していたようだ。ライブ配信の話題は主に開会式に対する印象、コロナ問題、日中文化に集中していた。そこで自然と 1964 年の東京五輪との比較も話題になった。

私は、1955 年～1973 年までの高度経済成長期の中間点にある東京五輪の開催は、日本国民に一層の自信を持たせたとみている。

そのもっとも分かりやすい事例は、日本が世界に誇る「新幹線」だ。1964 年 10 月 10 日に開会した東京五輪だったが、その直前の 10 月 1 日に開通している。当時、東京～新大阪間を、時速 210km、3 時間 10 分で結ぶ「夢の超特急」プロジェクトは、開発から工事までわずか 5 年 3 カ月という短期間で成し遂げられ、日本の驚異的な努力を誇り高く世界に見せつけた。1978 年、日本を訪れた鄧小平は新幹線に乗ったとき、「背中を押された」思いがしたという。そして、「日本に追い付け、日本を追い越そう」という決意を固め、毛沢東の計画経済時代との決別を意味する改革・開放路線の実施に踏み切った。

ホテルニューオータニは 1964 年につながっている

また、64 年東京五輪の開催に際し、国内の宿泊施設不足を解消するため、国家の要請のもと誕生したホテルニューオータニも印象に残る施設だった。世界初のユニットバスやカーテンウオール工法（あらかじめ作られた壁を取り付けるなどの合理的な工法）など最新技術が次々に導入された。17 階建てのこのホテルは日本初の超高層建築として知られただけではなく、「東洋一」のホテルとして日本と海外の交流にもしっかりとした足跡を残した。

一時的だが、中国大使館はホテルニューオータニの 15 階を借りて事務所にしていたこともある。私自身も 1981 年 3 月、はじめて東京を訪問したとき、このホテルニューオータニのお世話になった。

2002 年、岩波書店から出版された拙著『これは私が愛した日本なのか――新華僑 30 年の履歴書』（2014 年、岩波現代文庫として『この日本、愛すればこそ』が再版）では、次のように記した。

「東京ではホテルニューオータニに泊まった。それだけのことだが、それ以来今日に至るまでニューオータニは私のもっとも好きなホテルである。中国から友人が来ると必ず連れていくし、疲れたときもニューオータニに行って、きれいな庭が見下ろせるラウンジで紅茶を啜りながら、大平学校のことや最初に泊まったときのことに思いを馳せる」

ある意味、ホテルニューオータニは、64 年東京五輪のことを知らない外国人の私にその余韻を楽しませる場所でもあった。

1964 年は、他にも、日本社会に変化が起きている。カラーテレビの普及と、国民の海外旅行の自由化をもたらした。同年 4 月 1 日から、「1 人年間 1 回限り」「海外持ち出し 500 ドル」という回数と外貨制限があるものの、日本人は海外旅行に自由に行けるようになった。さらに、66 年 1 月 1 日以降は、回数規制もなくなった。

東京 2020 は過去とは違う方向性を見せるべきだった

中央公論 2009 年 2 月号に、作家、五木寛之氏の論考「衰退の時代に日本人が持つべき『覚悟』」が掲載されている。

五木氏はこの中で、「今、われわれは、衰退の覚悟を決めたうえで、『優雅な縮小』を目指すべきではないでしょうか」と日本人に呼びかけている。日本が「モノづくり」で他国と伍していくのは不可能。中国やアジアの諸国との競争で勝てるとは思わない。知的に尊敬される小国になるべきだ、と力説していた。

そういう意味では、2020 年の東京五輪は本来、成熟期の日本の姿を世界にアピールし、経済成長の成果を見せるより、さん然と輝く日本文化と知的に尊敬される日本のソフトパワーを展示する舞台にすべきだったのではないか。

しかし、開会式を見たあとの率直な感想は、日本はそのソフトパワーをどう見せるべきかについてはまだ右往左往していると感じた。

映画監督で芸人でもある北野武氏も、24 日夜、TBS の「新・情報 7days ニュースキャスター」に出演して「昨日（23 日）の開会式、面白かったっすね～。ずいぶん寝ちゃいましたよ。金返してほしいですね」と皮肉ったり、「（開会式に）税金からいくらか出ているだろうから、金返せよ。困っ

たね。あれ、外国に恥ずかしくて行けないよ」と話し、痛烈に批判したりした。

正直に言うと、今回の開会式のコンテンツの選定には、主催側の自己陶酔的な判断要素がかなり入っていたと感じる。世界の人々に効果的にアピールする意識が全然足りない。実は私も北野武氏のように寝てしまった。選手入場の途中に目を覚まし、最後まで観賞することができたのは幸いだった。

東京タワーとスカイツリーから見える、日本の変化

冒頭に触れたWeiboのライブ配信では、私は64年東京五輪と今回の東京五輪の比較として、東京タワーと東京スカイツリーの美を使って説明した。

東京タワーの美は中国語で言えば、「陽剛」の類に入る。スカイツリーは「陰柔」の美を見せる。前者は力強い気概・風格、野性味にあふれた精悍（せいかん）な男らしさを表現するときによく使われる。後者は、繊細な美しさを表す際に用いられることが多い。

強烈な光で自らの存在を強調している東京タワーはどこか荒々しいところがあり、高度経済成長期の日本の力強さを表現していると私は思う。一方、世界有数の富裕国になった今の日本は、以前よりもっと繊細さと上品さで自らの存在を強調する時代に生きている。それぞれの時代のランドマークとして誕生した東京タワーと東京スカイツリーは、そのそれぞれの時代の美意識を映し出している。

7 年前に、私は別のコラムで、スカイツリーの美に対して、次のようにやや毒舌コメントを記したことがある。

「成熟した美を見せてくれているスカイツリーのどこかには、『夕陽無限好、只是近黄昏』のような哀愁が漂っている気がする」

「夕陽無限好、只是近黄昏」とは唐の李商隠の詩である。夕日は素晴らしいけれども、ただ、黄昏（たそがれ）に近い、最盛期が過ぎた、という意味だ。

日本に生活基盤を置いている以上、私は「黄昏」に傾いていく日本に対してどことなく抵抗感を覚えている。昼頃の力強さがなくても、午後 2 時、3 時頃の元気さは保ってほしいと思っている。その意味でも、老朽化が噂されている東京タワーの存在はまだ捨てがたいものだ。

ここ 2、3 年、スカイツリーの照明はかなり改善された気がする。東京五輪の開会式に見られた問題は、日本の成熟した美をいかに世界の人々に伝え、共感を誘えるように見せるか自己分析しきれていないということだろう。日本はそこに、もっと磨きをかけるべきだ。

開会式だけでなく、大会全体も今後の日本の進路にいろいろな考えるべき課題を残してくれるだろう。

（作家・ジャーナリスト　莫 邦富）

****

【思う事】

…… 中央公論 2009 年 2 月号に、作家、五木寛之氏の論考「衰退の時代に日本人が持つべき『覚悟』」が掲載されている。

五木氏はこの中で、「今、われわれは、衰退の覚悟を決めたうえで、『優雅な縮小』を目指すべきではないでしょうか」と日本人に呼びかけている。日本が「モノづくり」で他国と伍していくのは不可能。中国やアジアの諸国との競争で勝てるとは思わない。知的に尊敬される小国になるべきだ、と力説していた。 ……

そして

日本大判寫眞家協会の持つべき『覚悟』

他分野と伍して行くのは不可能

「今、われわれは、衰退の覚悟を決めたうえで、『優雅な縮小』を目指すべきではないでしょうか」

とある様に

『銀塩写真の伝統を守り続けて行く希少な価値のある存在となるべき。』

と思うこの頃。

HP 管理人